

# 社会福祉専門職を目指すための 福祉教育の展開プロセス ——複線経路・等至性モデルによる分析

金 田 喜 弘

## 〔抄 録〕

社会福祉士及び介護福祉士法が施行され 30 年が経ち、社会福祉専門職のひとつである社会福祉士が多くの福祉現場で実践を展開している。国の政策動向においても、社会福祉士への期待は大きい一方で、養成校の減少や福祉離れが深刻化している。本研究では社会福祉学部が社会福祉専門職を目指すキャリア選択と、社会福祉士実習やその他の福祉教育との関連性について明らかにすることを目的に、複線経路・等至性モデル（TEM）を用いて分析を試みた。分析の結果、「社会福祉実習に臨むことを決断（第 1 期）」、「社会福祉実習を通じた学び（第 2 期）」、「ソーシャルワーカーとして働くことを選択（第 3 期）」の 3 つの時期区分で推移していることがわかった。社会福祉専門職を目指すための福祉教育の展開プロセスとして、①社会福祉実習の重要性、②地域福祉フィールドワークや福祉現場インターンシップなどの社会福祉実習以外の補完的な取り組み、③ソーシャルワークイメージの明確化の 3 点が重要であることが明らかとなった。

キーワード：TEM 福祉教育 社会福祉専門職

## はじめに

社会福祉士及び介護福祉士法が施行されて、30 年が経とうとしている。社会福祉士の登録者は 20 万人を超え、様々な福祉現場で実践を展開している<sup>1)</sup>。社会福祉士・介護福祉士就労状況調査（2015）によると、社会福祉士が就労している分野は、高齢者福祉関係の割合が最も高く 43.7% となっている。次いで、障害福祉関係 17.3%、医療関係 14.7%、地域福祉関係 7.4%、児童・母子福祉関係 4.8%、行政相談所 3.4% となっており、多様な分野で就労している<sup>2)</sup>。2017 年 2 月の社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会において、ソーシャルワークには様々な機能があり、地域共生社会の実現に資する「包括的な相談支援体制の構築」や「住民が主体的に地域課題を把握して解決を試みる体制づくり」を推進するにあたっては、こうした機能の発揮がますます期待されると整理している<sup>3)</sup>。厚生労働省は 2015 年の新たな時代に対応した福祉の提供ビジョンを受け、翌年に「我が事・丸ごと」地域共生社会実現本部を設置し、地域包括ケアの深化・地域共生社会の実現にむけて、政策的にも推進する動きがみられる。地域共生社会を推進するためには、そこで暮らす住民が自治に基づく実践はもちろんで

はあるが、住民の持つ力に着目しそれらを引き出すための支援や、地域で生きづらさを抱える方への専門的な支援も含め、そこでの社会福祉専門職、とりわけ社会福祉士への期待は大きいといえる。先の社会保障審議会においても、社会福祉士の活用の基本的な考え方として、「多様化・複雑化する地域の福祉課題に対応できる能力をさらに開発し活用していくために、具体的な役割の明確化や実践力の強化等のための教育体系の充実に向けた再検証等が必要」とされている<sup>4)</sup>。この様に社会福祉士としての機能や役割を期待されている一方で、社会福祉士国家試験の合格率は、第29回の試験結果を見ても25.8%であり、他の対人援助の専門職に比べても極めて低いといえる<sup>5)</sup>。

ところで本学は、1965年に文学部の一学科として社会福祉学科が開学し、2年後には社会学部社会福祉学科、2004年には社会福祉学部となり、多くの卒業生が社会福祉領域をはじめ、医療機関、教育、自治体など様々な現場に輩出している<sup>6)</sup>。現在、社会福祉士等の資格が取得できる福祉系大学等は、2015年の時点で262校（定員22,064人）となっている。しかし少子化や経済状況の変化の中で、学生募集が叶わず養成を断念する養成校も増加しているのも現実である。岡（2011:61）は、「福祉分野における不十分な労働環境や否定的イメージの影響を受けて福祉離れが進み、社会福祉系大学の入学者数や卒業後福祉系進路を選択する者の減少など社会福祉従事者養成の根幹を揺るがす事態が進行している」と警鐘を鳴らしている。実践現場が社会福祉の本流であるならば、社会福祉士等の専門職を輩出する養成校が源流ともいえる。その源流が枯渇すれば本流にも影響を受け、結果的にそこで暮らす当事者へ大きな影響を受ける。このような状況の中で、実践力の高い社会福祉士を養成し福祉現場で送り出すためには、養成校の学習カリキュラムとして座学での学びや社会福祉実習、そしボランティア活動やインターンシップなど様々な経験の場を提供することにより、社会福祉専門職としてキャリアを選択できるための支援やプログラム開発が急務といえる。

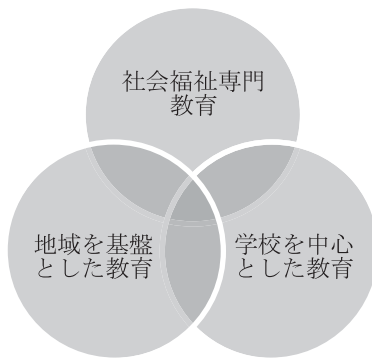
本稿では、学生がどの様に社会福祉専門職としてのキャリアを選択していくのか、その行動のプロセスを考察した上で、そこでの福祉教育の展開プロセスの有用性について述べる。

## 1. 本研究の目的

本研究の目的は社会福祉学部の学生が社会福祉専門職を目指すキャリア選択と、社会福祉士実習やその他の福祉教育との関連性について明らかにすることにある。中央教育審議会（2011:17）では、キャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義されているが、キャリアの捉え方や、それに付随する考え方は整理されているとはいいがたい。本稿では、キャリアを「社会福祉専門職を目指し、そこに向かって進む時間的持続性を持った概念」としてとらえ、それを形づくるプロセスについて考察することとする。

さて、キャリア教育に関する先行研究においては、いくつか分析枠組みで研究がされてい

図1 福祉教育の三領域



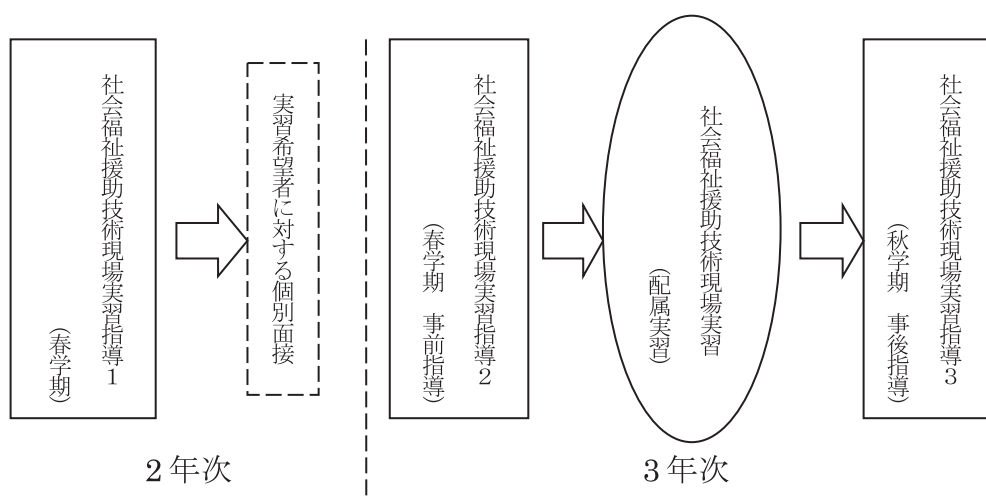
出典 「福祉教育実践ハンドブック」全国社会福祉協議会 2003年

キャリア形成の変容やそこでの福祉教育との関係性について分析されているものはほとんどない。本研究において、キャリア形成の変容プロセスとそこでの福祉教育のあり方を検討することは有用であると考え。

ところで、福祉教育について原田（2003）は、①学校を中心とした福祉教育、②地域を基盤とした福祉教育、③社会福祉専門教育の領域に分類できると述べている（図1）。社会福祉専門教育の領域は、「社会福祉教育」といわれ、社会福祉従事者養成としての社会福祉専門教育もひとつに含まれており、本稿では、福祉教育をソーシャルワーカー養成における福祉教育として捉えることとする。

さて、本学における4年間の学びの中の特徴として、3点あげられる。1つ目は、1年次の「社会福祉入門ゼミ」、2年次の「社会福祉基礎ゼミ」「社会福祉援助技術演習」をはじめ、4年間を通じて少人数ゼミを設定し、学生一人ひとりの適性に応じた教育支援を行う点である。また進路や資格取得に応じて①福祉援助、②福祉開発、③福祉保育の3つのコースを設定し、いずれも現場で生かせる実践的な科目を設けている。2つ目は実習教育の充実である（図2）。社会福祉実習の流れとして、実習に赴く前年度より社会福祉援助技術現場実習指導1（春学期）を行い、実習の目的と意義、各領域の状況や今日的課題について学び、実習に赴く準備を進めている。その後実習希望者全員に対して個別面接を行い、自身の問題意識を高めるよう促している。その後3年次では実習前の事前学習（社会福祉援助技術現場実習指導2）として、実習領域の制度・政策の理解、対象者理解、記録の書き方等を学び、実習テーマの設定を行う。その後それらを踏まえて社会福祉の実践現場へ実習に赴く。そして実習終了後の事後学習（社会福祉援助技術現場実習指導3）では実習での学び・気づきと学習課題を明確化し、他の学生とも共有しながらスーパービジョンとフィードバックを行い、最終学年度での学びのテーマを設定する。これらの一連の流れの中で、全体的にパッケージを形成しながら総合的に実習教育を展開している<sup>7)</sup>。

図2 社会福祉援助技術現場実習の学びの流れ図



3つ目は実践力を養うために、体験型の学びを数多く開発し提供している点である。例えば、地域福祉フィールドワーク（以下、FW）は学生が小地域の住民福祉活動に関わり、その暮らしを支えるために何ができるのかを住民と一緒に考えていくなど、主体的な取り組みを開発している<sup>8)</sup>。また、福祉現場インターンシップ（以下、IP）は、実践力のある社会福祉士、精神保健福祉士、保育士の養成を目指し、単位実習以外で福祉実践現場に赴くことで、当事者理解や社会福祉専門職の視点などを学ぶ機会を提供している。他にも、社団法人日本国際児童図書評議会の「世界のバリアフリー絵本展」の企画・実施、原爆展を通じた平和学習など、学生が主体的に取り組むことができる機会を提供している。

本研究では、学生が入学時から卒業までに、どのような経験を蓄積しながら、社会福祉専門職を目指すのか、その変容プロセスと、社会福祉士実習やその他の福祉教育プログラムとの関連性について分析することを目的とする。

## 2. 研究方法

研究方法としては、社会福祉専門職に向かうキャリア形成とそこでの福祉教育のあり方について、複線経路・等至性モデル（以下、TEM）の分析方法を用いる。荒川ら（2012:97）はTEMを「個々人がそれぞれ多様な経路をたどったとしても、等しく到達するポイント（等至点：Equifinality Point；EFP）があるという考え方を基本とし、人間の発達や人生経路の多様性・複線性の時間的変容を捉える分析・思考の枠組みである」と定義している。

この方法論の特徴について、サトウ（2012:1）は「対象者の具体的な経験のプロセスを、時間を捨象せずに描き出すとともに、対象者の経験を社会との関係性のなかで理解すること」であると整理している。TEMを分析に用いることによって、境ら（2012:205）は「個々の事

例に含まれる対象者の具体的な経験や時系列を保持しつつモデル化し、それに対する理解を求められる」としており、本研究において4年間の学生生活の中で社会福祉実習やその他の様々な経験を通じて、ソーシャルワークのイメージの変容や社会福祉専門職としてのキャリア形成の変遷を理解するためには有効な分析法と考える。また、TEMによって図式化することにより学生自身の成長過程を可視化することができ、専門職養成における指導の工夫やキャリアへの不安や困難への対処において有益となり、ひいては、社会福祉専門職養成の一助ともなると考えられる。

TEMを用いたインタビューの対象者数について、荒川ら（2012:98）は「経験則的に、1・4・9の法則を提案することができる」と述べている。また、対象者が1人の場合は、個人の経験を描くライフストーリーをとしてTEMを分析手法として用いることができ、「個人の経験の深みをさぐることができる」と整理している。本研究では、個人の経路を深く洞察するため、1名のみを対象者とした。インタビュー調査の概要については以下の通りである（表1）。

表1 インタビュー調査概要

調査方法	半構造化インタビュー
調査対象	社会福祉士実習（2016年度）を受講した学生 A 氏
調査時期	2017年12月24日（第1回）、2018年1月7日（第2回）
調査内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入学前：佛教大学・社会福祉学部を受験するきっかけ</li> <li>・入学時：1年次・2年次での学び</li> <li>・主体的な活動の取り組みについて</li> <li>・3年次：実習について（事前学習・実習中・事後学習）</li> <li>・4年次：キャリア選択</li> <li>・社会福祉専門職のイメージの変化</li> </ul>

インタビューデータは、意味の各まとまりに分類してコード化し、それらを研究の目的に照らし合わせながら、時間軸に沿って検討した。次に、「社会福祉士実習に赴く」、「社会福祉専門職として働く」を等至点（EFP）として定め、これを分析焦点とした。一方で、「社会福祉士実習に行かない」、「社会福祉専門職を目指さない」を両極化した等至点（P-EFP）とした。その上で、等至点（EFP）にいたる過程とその特徴について検討した。TEM図については、A氏に確認を受け、作成・修正を行っている。表2にTEMの用語ならびに本研究における意味を示す。

表2 TEMの用語と本研究における意味

用語	用語の内容	本研究における意味
等至点：EFP (Equifinality Point) 両極化した等至点：P-EFP (Polarized EFP)	多様な経験の径路がいったん収束する地点	EFP-1：社会福祉士実習に赴く P-EFP-1：社会福祉士実習に行かない EFP-2：社会福祉専門職として働く P-EFP-2：社会福祉専門職を目指さない

分岐点：BFP (Bifurcation Point)	ある選択によって、各々の行動が多様に分かれていく地点	①社会福祉学部を選択 ②地域福祉フィールドワークへの参加 ③地域福祉領域を選択 ④ロールモデルとの出会い ⑤福祉現場インターンシップへの参加 ⑥福祉現場で就職活動 ⑦社会福祉士国家試験の受験
必須通過点：OPP (Obligatory Passage Point)	論理的・制度的・習慣的にほとんどの人が経験せざるをえない地点	実習に赴く
社会的ガイド SG (Social Guidance)	個人の選択や行動を後押しする認識や認知、援助的な力	SG 1：生活の視点を理解 SG 2：社会福祉の仕事のイメージを高める SG 3：幅広い視野の獲得
社会的方向付け：SD (Social Direction)	個人の選択や行動に阻害的・抑制的に働く事象、認識や認知	SD 1：社会福祉学部だから実習は行くべき SD 2：福祉業界は大変 SD 3：社会福祉学部だから資格は取るべき

なお、調査対象者には本研究の目的・主旨を説明するとともに、参加協力は本人の自由であり、参加協力しない場合にも一切の不利益を受けないこと、また対象者の個人を特定できないよう倫理的な配慮を行うこと、そして研究目的以外にデータを使用しないことを説明した上で、同意を得た。あわせて、佛教大学「人を対象とする研究」倫理審査規程に基づき実施した<sup>9)</sup>。

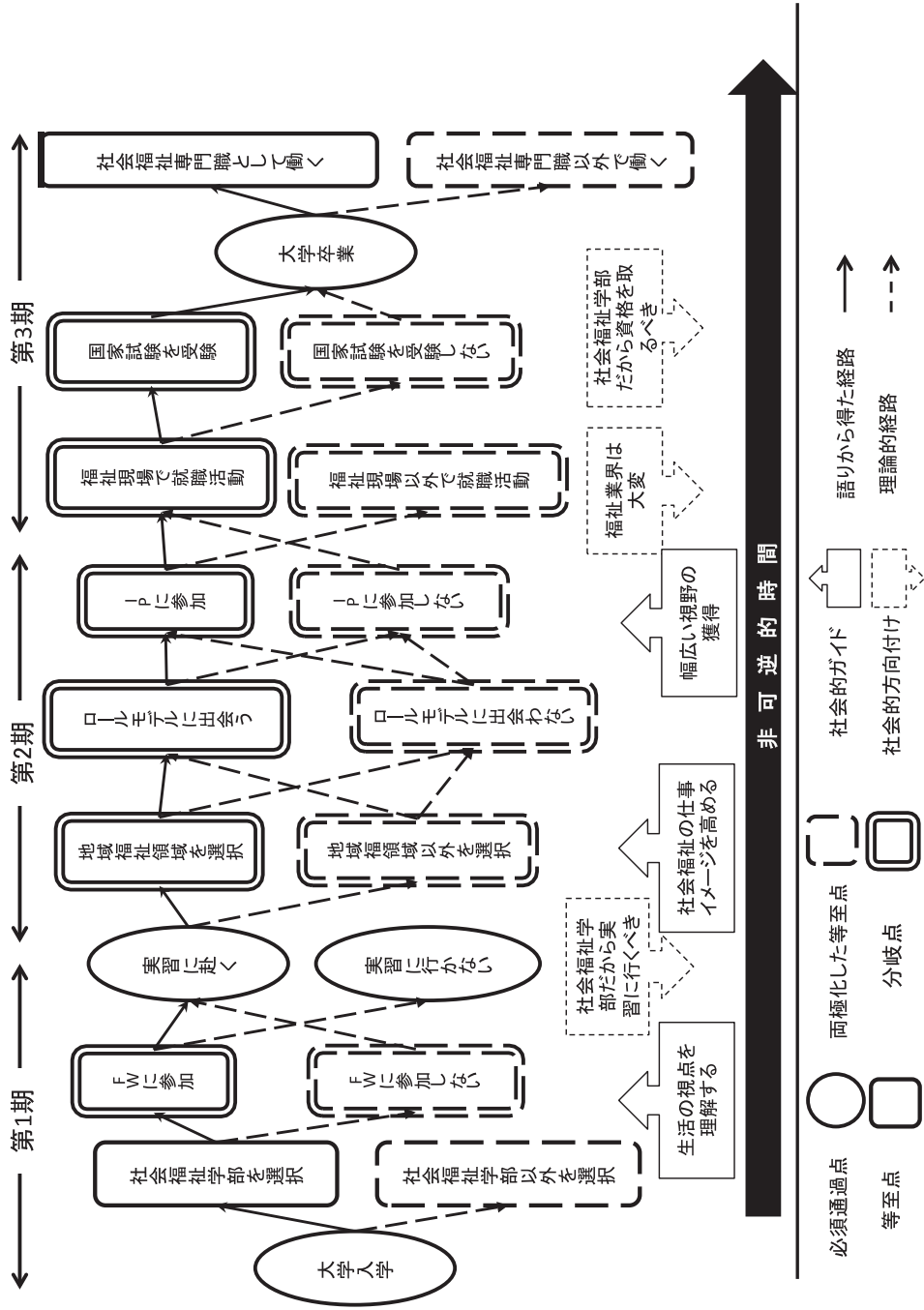
### 3. 結果

分析の結果、TEM 図が作成できた (図 3)。そこから、「社会福祉実習に臨むことを決断 (第 1 期)」、「社会福祉実習を通した学び (第 2 期)」、「ソーシャルワーカーとして働くことを選択 (第 3 期)」という 3 つの時期区分で推移していることがわかった。以下、A 氏が社会福祉専門職に向かうプロセスを時期ごとに説明する。なお、A 氏のインタビュー内容は「」で引用しており、( ) については、筆者が意味を分かりやすくするために追加した説明である。

#### (1) 社会福祉実習に臨むことを決断

A 氏は「福祉を学びたい」と思い大学進学を考えた。具体的に大学を選択する際には、「自宅から通える所」、「社会福祉士の合格率の高い大学」、「オープンキャンパスでの印象が良かった所」を条件として複数校検討し、第一志望の大学に入学した。社会福祉に対する動機については、「人と関わる仕事」や「何か人の役に立ちたい」と考えていた。A 氏の母が看護師をしており、「大変そうな仕事」であり「細かな仕事」という印象を持っていた。しかし、「大変そうだがいつもイキイキ」している母の姿を見ており、「社会福祉学部を選んだのは、やっぱり母の影響は大きい」と考えられる。入学前の社会福祉のイメージは「介護」や「人と話をする」と捉えており、対象者については「高齢者や障害者の方に関わる」と考えていた。

図3 社会福祉専門職を目指すための福祉教育の展開プロセス



入学後、1年次の学びの印象としては、「社会福祉ってとても幅が広い」と対象者が多様であること、そして「福祉とひとことと言ってもとても歴史が深い」事を学んだ。しかし、当時のゼミは「全然面白くなかった」と感じていた。その理由は「あまり盛り上がらないメンバーがそろっていた」ということもあるが、ふりかえると自分自身に「グループを作る力」や「コミュニケーション力」が低く、そして「受け身の姿勢で授業を受けていて、主体性はなかった」と述べていた。この頃の社会福祉のイメージは「(社会福祉の)現場は介護だけではない」と捉えており、対象者像の広がりを見せていた。

2年次の社会福祉士実習に係るゼミについては、「一方的なレクチャーを受けた」、「領域のビデオを観た」という印象であった。社会福祉士実習については、「そろそろ実習が始まるんやな」という捉え方であった。一方で、「(ゼミ形式の授業である)社会福祉援助技術演習は大変面白かった」と感じた。授業の内容として印象に残っているのは、「新聞記事の切り抜きを持ってきて、20分間の報告と議論する」事と、「コミュニケーションやそこでの距離感や聞き方など対人援助の基礎」を学んだ事であった。このゼミでは、「メンバーから4名ほど選ばれ(中略)何か連絡係的なもの」として「ゼミ委員」を担った。委員の選出については、「誰もいないのであれば私がする」として立候補した。「誰も手を上げず決まらないのは、時間をもったいない」とも述べていた。

この頃からFWのひとつである、小野郷の取り組みに初めて参加した。「実は1回生の時にあったFWの説明会に参加していて、(小野郷の学生が登録している)LINEには入っていた」が「なかなか一歩踏み出せなかった」と述べていた。また、2年次からボランティアサークルにも入った。「実習も始まるし、何かしなくちゃいけないと思った」のが大きな理由である。FWについては、「2回生でも社会福祉原論の授業で先輩がPRに来て、友人も参加するし行ってみよう」と決断をした。小野郷の取り組みに参加し、「地域というか、地域福祉」に関心が高まった。また、活動を通じて「人を変えられるのは人」という価値観を持つようになった。

社会福祉士実習に臨むための面接は2回行われた。1回目の面接では、「領域や実習に対する考え方も定まっていなかった」が、FWの活動において、「困っている人だけではなく、活動したい住民さんへの関わり」に関心が高まった。また、一緒に活動している先輩から「実習の話をとくさん聞いた」ことで、実習のイメージが高まった。2回目での面接では、「地域福祉(領域)で実習をしたい」ということが明確となり、「社会福祉協議会(語りでは社協)で実習したいとアピール」をした。この頃の社会福祉のイメージは「(相談援助等を)窓口でするというよりも、外に出て関わっていく」という捉え方をしていた。それは「小野郷でのワーカーの動きを見てそう思った」と述べていた。



## （2）社会福祉実習を通した学び

3年次になり社会福祉士実習ゼミが社会福祉協議会（以下、社協）で実習を行う地域福祉領域に配属された時、「やったーという感じ」だった。また「地元の社協でできることが嬉しかった」と述べていた。一方で、「知識がほとんどないので、乗り切れるかが心配」であり、「社協については、本では読んだが実際の動きがわからない」という不安も持っていた。具体的なゼミでの学びは、「本当に難しかった」と述べ、具体的には「コミュニティワークとコミュニティソーシャルワークの特徴や違いなど、調べてはみたものの理解しにくかった」と感じていた。FWについては、「バイトの関係もあり、2ヶ月に1回程度」の頻度で継続的に参加をした。この活動の場は、「（私がここにいるという）居場所」と感じており、「（活動や先輩との中において）空間が心地いい」と述べていた。また、FWは「地域に入っていくイメージがあり、社協実習と似ていると思った」とFWと地域福祉領域の実習との親和性の高さについて述べていた。

社会福祉士実習の全体の印象としては「面白かった」と述べ、特に「地域の活動場面や会議等のやり取り」での学びが多かった。また社協で働くワーカーとの出会いとして、「共同募金の業務を見させてもらった時に、Oさんは社協の中でもまだ若手のワーカーですが、責任のある仕事をしっかりと役割を持ってされている姿」に感銘を受けた。また、「Bさんは、まだ1年目のワーカーなのに、担当されている業務について（こなすだけでなく）課題を持って取り組んでいて、（より良いものに）変えていこうと努力している」のが印象的だった。そして、実習指導者であるS氏の印象に残っているのは「地域の当たり前を創る」という言葉で、「社協ワーカーの仕事ってかっこいい」と感じる事ができた。

社会福祉士実習を終え実習報告会の準備に取り組んだ。事後のふりかえりの中で、「春学期はやる気の見えなかったOくんが、実習から戻ってきたらいっぱい発言をしていた」と、ゼミのメンバーの変容に驚いた。それは実習を通じて「現場で色々と体験し、だからこそリアルな言葉で語る」ことができたのではないかと述べていた。報告会の準備では、司会を積極的に行っていた。「これまでは誰もやらないから私がやるが多かったんですが、今回はやってみたい」と思い主体的に行動した。それは「実習でのワーカーの姿を見て、私も会議などを進めていく力を身につけたい」と思ったからである。実習報告会は「みんなで創っていく実感があつた」と述べ、「意見や疑問、そして提案」をしながら進めることができた。ここでは「先生が教えてくれるのではなくて、自分たちで考える」力が身についたと述べていた。

社会福祉士実習後、「他の領域の実践も見たい」として、実習後にIPに参加をした。また、「障害者福祉の実践に触れながら、社会福祉法人としての役割について」学ぶことができた。

また、精神保健福祉士の資格取得については、「高校時代に祖母が入院し、（中略）1回生の春の時に病院で医療ソーシャルワーカーに出会った」ことがきっかけで、「（社会福祉の勉強をしているのであれば）精神保健福祉士も取ったらいいよ」とアドバイスを受け、社会福祉士と

精神保健福祉士の取得を目指すこととなった。

社会福祉のイメージとしては、「IP の経験もあるのですが、人と組織というか、ソーシャルワーカーと法人の関係性について思うようになった」と述べ、「ソーシャルワーカーとしての共通基盤の上に、社協ワーカーの固有の専門性がある」とソーシャルワークにおけるジェネリックとスペシフィックのイメージが高まった。

### (3) ソーシャルワーカーとして働くことを選択

4 年次でのゼミでは、「(さらに) 地域福祉を学びたい」と思い、地域福祉を研究しているゼミを選択した。「ゼミ論文ではコミュニティワーカーに必要な専門性」をテーマに執筆をした。また、就職活動については、「アルバイト先で働いている職員を見て美容関係にも興味」を持ち、美容関係の企業の就職活動を行い内定を得た。一方で、社協での実習を通して「自分がワーカーとして働く姿をイメージすることができた」とし、「(結果として) 社協ワーカーとして働きたい」という思いに立つことができた。そして、社会福祉士の国家試験については、「(社協において社会福祉士資格は) 必須なので、それがモチベーションのアップにつながった」とし、精神保健福祉士についても「地域で仕事をするとすると、精神(障害)の方の場面にも出会うと思うので、こちらも取得したい」と述べていた。

社会福祉のイメージについては、「将来、社協ワーカーとして働くという具体的なイメージ」があり、「個別支援だけではなく、地域づくりというか地域支援の両方を行う」と捉えていた。

## 4. 結論

社会福祉専門職を目指すための福祉教育の展開プロセスとして、以下の3点にまとめることができた。まず、社会福祉士実習の重要性である。社会福祉士実習は、国家資格である社会福祉士になるための必須科目として位置づけられている。社会福祉の現場に24日以上、180時間以上の現場実習が課せられており、事前・事後学習を含めると、およそ1年間かけて学ぶ科目でもある。単なる科目としての位置づけ以上に、「福祉現場の実際に触れる」ことより、大学の講義等の座学と実習での実践とが切り結ばれる場面となっている。事前学習で、「社協の役割について本を読んだ」が実習に行くことで「社協、特に社協ワーカーの役割について理解が深まった」と述べており、理論と実践が接近する機会となっていることがわかった。また、社会福祉士実習でのソーシャルワーカーとの出会いも、社会福祉専門職をイメージするにあたって大きく影響しているといえる。A氏が語った3人の社協ワーカーの姿をみて「ワーカーの仕事はカッコいい」と感じたり、「将来、自分がワーカーとして働く姿をイメージできた」というように、より良いロールモデルに出会うことで、自身の社会福祉専門職像を明確にできる場でもあるといえる。社会福祉専門職を選択する為には、そこで働くワーカーがいきいきとやりがいを持って実践に取り組んでいる姿を見せることが重要であろう。

次に、FW や IP などの社会福祉実習以外の補完的な取り組みの重要性である。本学においては、社会福祉実習を中核に置きながら、FW や IP など様々なプログラムを開発し、学生に提示をしている。この他にも、認知症カフェの取り組みや、ハンセン病を学ぶスタディツアーなど多様な取り組みを実施している。このような活動に参加することにより、社会福祉士実習だけでは学べない視点や気づきを得ることができる。A 氏が関わっていた小野郷の取り組みを見ても、そこで暮らす高齢者の暮らしや生きづらさに触れながら、民生委員やボランティアなどの活動者の想い、そして、そこに関わる地域包括支援センターや社協などの社会福祉専門職の動きをダイナミックに理解することができる。そして、「実習について先輩から話を聞いた」とあるように、FW などに参加をすると、同回生の横のつながりができるとともに、先輩・後輩の縦のつながりを作ることができる。そこで、活動以外の経験値も蓄積できると考える。A 氏が FW の活動を「私の居場所」と語っているように、学生自身の帰属意識を持てる仕掛けも重要と考える。さらに、これらは単位が伴う科目ではなく、学生が自主的に参加できる活動であり、受動的ではなく主体的に行動することで、問題意識が深まり多くの学びと気づきを得ることができることが明らかとなった。

そして、ソーシャルワークイメージの明確化の重要性である。A 氏の4年間の学びのプロセスにあるように、座学での学びや FW や IP などの主体的な活動を通じて、社会福祉に対する視点の広がりや深まりが出た。当初は、社会福祉は「介護」や「高齢者や障害者のもの」と捉えていたが、FW に参加することで、介護現場だけではなく、「多様な領域がある」ことを学び、さらに地域福祉について理解を深めていったことがわかる。また、社会福祉専門職の捉え方についても相談窓口で待つのではなく、「積極的に外に出てアウトリーチ」を展開するイメージに転換されていった。そして、社会福祉士実習や IP を通じて、社会福祉専門職としての「共通基盤としての専門性」と、各領域における「固有の専門性」の存在について捉えるようになった。これらの社会福祉や社会福祉専門職に対する認識の変容は、自然発生的に生まれるものではなく、授業はもちろん主体的な活動への参加が重要となる。そこで学生は、新しい知識や経験をインプットするだけではなく、社会福祉の本質や社会福祉専門職の役割や機能について、絶えず問い続ける視点が重要となる。自らの頭と身体と心をくぐらせ内省することで、まさしく「腑に落ちる」ことができるのではないかと考える。

一方、教員としては、一方向的な知識の提供だけではなく、アクティブラーニングなどの双方向的な授業展開を意識することが求められる。特に、ゼミなどの少人数クラスの際には一人ひとりに問いかけることも重要となる。福祉教育の実践は、一朝一夕に展開されるものではない。学生も早熟型もあれば晩成型もあり、成長の軌跡は様々である。そのためには気づきを促す場面を開発し、4年間の教育カリキュラムの中に、多様な形態で数多く配置することが求められる。それらを通じて、社会福祉専門職であるソーシャルワーカーのイメージ像を明確化できるのではないかと考える。

## おわりに

本研究では、一人の学生の4年間の流れを分析することで、社会福祉専門職を目指すためのキャリア形成には、実習教育をはじめとした福祉教育プログラムの重要性が明らかとなった。それは、個別に存在しているのではなく、互いに有機的に連動することで、体験と学びと気づきを蓄積させることができることがわかった。

一方で課題も多くあげられる。まず、本研究ではA氏とのやり取りは2回しか実施できず、さらに深い部分まで聞き取りをすることができなかった。インタビュー後のコード化やTEM図に対する確認と意見交換を継続的に複数回行うことによって、精緻化された分析が可能だと考える。また、TEM図を用いた際の等至点や分岐点と、社会的方向付けや社会的ガイドとの関係性を深く分析することができなかった。これらについては、今後の自身の研究課題としたい。

今回は1名の学生に対してライフストーリーを分析した。TEMにおいては、複数名の語りを一つのモデルとして整理することも可能である。今後は対象者を増やし、社会福祉専門職のキャリア形成における福祉教育の重要性について、さらに具体的な示唆が得られるよう研究を進めていきたい。

## 注

- 1) (公財)社会福祉振興・試験センター調べ。
- 2) 本調査は、社会福祉士、介護福祉士及び精神保健福祉士の登録機関である公益財団法人社会福祉振興・試験センターが厚生労働省の協力のもとに実施した。
- 3) 第9回社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会(2017年2月7日)「今後、ますます求められるソーシャルワークの機能」資料より。
- 4) 第1回社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会(2014年10月)
- 5) 他の対人援助職の合格率をみると、看護師(106回)は88.5%、医師(111回)は88.7%、保健師(103回)は90.8%となっている。
- 6) 社会福祉学部の2016年度卒業生の就職状況においては、社会福祉・医療関係の就職が全体の6割を占めている。
- 7) 佛教大学の実習と演習の関係性については、金田(2007)『社会福祉援助技術演習における演習教育プログラム開発ー自己覚知を促す演習からー』福祉教育開発センター紀要第4号、pp 37-40に詳しい。
- 8) 地域福祉フィールドワークとして、中山間地での地域福祉実践、独り暮らし高齢者の組織化支援、児童養護施設での学習支援、防災と福祉をテーマにした実践、ホームレスの方の炊き出し支援の6つを設定している。
- 9) 佛教大学「人を対象とする研究」倫理審査委員会において、承認され実施している。承認番号：H 29-41

## 文献

- 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ（2012）、「複線径路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例」立命館人間科学研究 25, 95-107.
- 中央教育審議会（2011）「中央教育審議会答申 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」文部科学省.
- 藤原慶二（2014）「福祉系大学におけるキャリア形成支援働くことから考えるキャリア教育の導入意義」関西福祉大学社会福祉学部研究紀要 17-2, pp.1-7.
- 長谷川武史・江蓮崇・藤木聖子・尾ノ内謙一（2017）「在学生のキャリア形成支援を中心とした社会福祉専門職者との交流事業報告」地域と住民 名寄市立大学, コミュニティケア教育研究センター年報（1）, pp.103-107.
- 厚生労働省（2002）「キャリア形成を支援する労働市場政策研究会」報告書, 職業能力開発局総務課・基盤整備室.
- 岡多枝子「社会福祉系大学生の体験的学びとキャリア形成：「つながる力」へのアプローチを目指して」現代と文化 日本福祉大学研究紀要 122 号, pp.61-74.
- 境愛一郎, 中西さやか, 中坪史典（2012）, 「子どもの経験を質的に描き出す試み：M-GTA と TEM の比較」広島大学大学院教育学研究科紀要第三部, 教育人間科学関連領域 61, 197-206.
- サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・ヤーン＝ヴァルシナー（2006）「複線径路・等至性モデル人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して」, 質的心理学研究, 5, 日本質的心理学会, pp.255-275.
- サトウタツヤ（編著）（2009）「TEM ではじめる質的研究－時間とプロセスを扱う研究をめざして」誠信書房.
- 山田宗廣（2014）「福祉専門職におけるキャリアプランとライフプランのイメージに関する一考察：佛教大学生に対するアンケートから」福祉教育開発センター紀要第 11 号, pp.109-119.
- 安田裕子, サトウタツヤ編著（2012）『TEM でわかる人生の径路 質的研究の新展開』誠信書房.
- 安田裕子, 滑田明暢, 福田茉莉, サトウタツヤ編（2015）「TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ」新曜社.
- 安田裕子, サトウタツヤ編著（2017）「TEM でひろがる社会実装－ライフの充実を支援する」誠信書房.
- 全国社会福祉協議会・全国ボランティア活動振興センター地域を基盤とした福祉教育・学習活動の推進方策に関する研究開発委員会（2003）「福祉教育実践ハンドブック」全国社会福祉協議会.

（かねだ よしひろ 福祉教育開発センター）